江戸時代における「待つた」・「待つたり」表現の史的考察

― 成立時期、特徴、及び「待つたり」表現の成立過程について ―

井　上　徳　子

1．はじめに

本稿における「待つた」表現、「待つたり」表現とは、「待つた」、「退いた退いた」、「起きた起きた」、「待つたり」、「買たり買たり」等のような「た」、「たり」を用いた命令表現を指す。

「た」は助動詞「たり」を経由して誕生したが、「待つた」表現に関しては、同表現は「待つたり」表現より早く成立したと推測し得る。なぜならば前者の使用例として、湯沢幸吉郎（1955:p.370）『徳川時代言語の研究』では、宝永3年（1706）の「起きた起きた」が示されているが、後者の表現例としては、それよりかなり遅れた文化6年（1809）の「コリヤコリヤ待たり待たり、ころぶよ」等が、湯沢（1957:p.406）『江戸言葉の研究』に示されているからである。

しかし、湯沢の両著においては「待つた」・「待つたり」表現の成立年代の確定はされておらず、従ってどちらの表現が先に成立したのかについても確定されてはいない。また、湯沢（1981）『室町時代言語の研究』においては、表題表現の出例は見られない。

そこで本稿では、江戸時代の主として上方の浄瑠璃作品中（ごく一部歌舞伎作品を含む）の会話部分における、「待つた」表現及び「待つたり」表現の出例状況の調査を通して両表現の成立時期を明らかにしたい。また、調査結果から「待つたり」表現成立の遅れの原因、その成立と並列表現の関係、及び「待つた」が多く出例する理由を考察する。

2．対象資料及び調査結果

2-1　対象資料

対象資料は、主として人形浄瑠璃などの詞章に曲節が記入されたもの、〈正本〉を対象とし、表題表現が口語表現であるため、その正本中の「詞」と記入された登場人物のセリフを表す部分を中心に調査を行った[i]。「詞」とは横山重（1971:p.43）によれば、「平素の会話と同一かそれに近い語りをする部分」である。

資料の時代範囲は、江戸時代とした。それは既に1.はじめに、で述べたように湯沢の両著（1955, 1957）において表題表現の使用例の提示がある一方、湯沢（1981）『室町時代言語の研究』中には同表現の使用例の提示がないためである。

今回、調査対象とした正本数は464点である。その内訳は古浄瑠璃期と新浄瑠璃期の境を近松門左衛門（以下、近松）の「出世景清」（1685）として分類すれば[ii]、古浄瑠璃期に属する正本数は168点、新浄瑠璃期に属する正本数は296点である[iii]。

浄瑠璃の作品数であるが、鳥越文蔵（2002:pp.5-6）によれば、古浄瑠璃時代のものとしてはごく大まかに述べて約500点、新浄瑠璃時代の作品数は約700点とされる。

2-2 「待つた」表現

2-2-1 初出例、出例数、その特徴

先ず、江戸時代初期の古浄瑠璃期から新浄瑠璃への過渡期までの浄瑠璃正本を調査した。初期の所属不明の古浄瑠璃正本5点[iv]、六字南無衛門の正本1点[v]、若狭守藤原吉次の正本10点[vi]、井上播磨掾の正本10点[vii]、伊藤出羽掾の正本11点[viii]、及び山本角太夫の正本53点の合計90点を調査した。しかし、「待つた」・「待つたり」表現は見られなかった。

更に、新浄瑠璃への過渡期に活躍した宇治加賀掾（以下、加賀掾）の元禄中期以前の正本78点中にも「待つた」・「待つたり」表現の使用は見られなかった[ix]。

同表現の出例があってもよいと想定される場面つまり、緊急に相手に対して何らかの行動を命令、要求或いは促したい場面においては、「待て」、「待ち給へ」或いは「しばし」、「まつしばらく」等が使用され、表題表現の使用は見られない[x]。

以上の調査結果より古浄瑠璃期の初期から新浄瑠璃への過渡期までにおいては、「待つた」・「待つたり」表現の使用は無いものと推測し得る。

元禄11年（1698）、近松の歌舞伎作品「上京の謡始」において初めて、次の(1)に示すように「待つた」の出例が見られる。（以下、表記は原文に依る。）（出典:頁）

(1)「てきたいすると命をとるぞ。」（中略）つぼねもかうさんし。「則是がゆり姫ねま成」とをしへれば。王子「扨ては是にゐるか」としんでんへかけ入。所へ花王丸しやうじをさつとあけつつと出。「**まつたまつた**。」（『近松全集』15巻:p.168）

この「まつた」初出後、同表現の使用は次の3例が示すように、近松ばかりではなく、加賀掾、紀海音の作品においても見られるようになる。

(2) 元禄末～宝永初年（～1703）「善峰寺開帳」

（『古浄瑠璃正本集』加賀掾編 4 巻:p.188）

くるくると追取まはし鑓ぶすま。のかさぬ。やらぬとつめかくる。造酒之進両手を上。あゝしばらく**まつたまつた**。

(3) 宝永 3 年（1706）「卯月紅葉」（『近松全集』4 巻:p.481）

けはしくかどをたゝきたて。これ**おきたおきた**。二かいのむしこをはづいてうへからおびがさげてある。

(4) 宝永 7 年以前（1710 以前）「熊坂」（『紀海音全集』1 巻:p.71）

天のあたふる親の敵と。走りかゝりて切かけ給へばひらりと飛さり。**ヤアまつたまつたそこつなされな**。

次に出例数であるが、「待つた」を含むその他の同表現の出例数、出例年を表 1 にまとめたところ次の 3 点が確認された。

(5)「まつた」の初出後約 10 年間に「出た出た」、「おきたおきた」、「明た明た」など「まつた」以外への同表現の広がりが見られる。

(6) 同表現には一切待遇表現が付加されていない。

(7)「まつた」（「待つた」、「待ッた」等を含む）の出例数は全調査資料中において 181 例であり総出例数、260 例の 69.6％に相当する。しかもこの「まつた」が先に述べたように最も早く出例している。

表 1　個別「待つた」表現出例数及び出例年

個別表現	例数	出例年
まつた	181	1698, 1701, 1702, 1704, 1705　以下略
出た出た	3	1704 頃, 1742, 1765
おきたおきた	2	1706, 1758
明た明た	2	1710 以前, 1720
いふたいふた	3	1714 頃, 1775
駕やつたやつた	2	1718, 1728
通つた通つた	2	1720, 1776
立ッた立ッた	5	1723, 1737, 1751, 1753, 1759
退いた退いた	13	1725, 1728, 1735, 1737, 1738　以下略
きつたきつた	5	1725, 1754, 1765, 1770, 1779
遂げた遂げた	2	1736, 1742
出した出した	5	1740, 1747, 1764, 1780, 1780
逃げた逃げた	2	1745, 1769
来た来た	3	1748, 1770, 1778
いんだいんだ	2	1754, 1758
渡した渡した	2	1764, 1775
1 例のみの表現	26	
合計	260[xi]	

(6) (7) は「待つた」表現の特徴と考え得る。(7) については 3-3 において考察する。

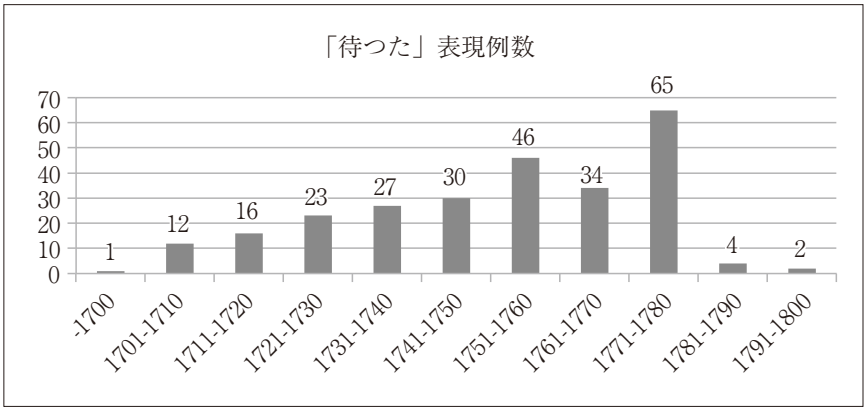
2-2-2 「待つた」表現の年代別出例分布

同表現の年代別出例分布状況であるが、全資料中に見られた「待つた」表現の総出例、260 例を 10 年毎に区切り、その出例数をまとめ、グラフ 1 に表し年代別出例頻度を比較した。その結果、次の (8) の事実が確認された。

(8) 元禄 11 年(1698)の近松歌舞伎作品に見られた「まつた」の出例を起点に、以後、その出例頻度が概ね右肩上がりに増加する。

しかしながら 1781 年以降、急激にその出例数が減少している。それは単なる使用数の減少ではなく、浄瑠璃がそれまでの名作者を失い、また舞台技術上でも行き詰まり歌舞伎に押され、その人気が衰えたため、浄瑠璃作品それ自体が乏しくなっていったという事情による。つまり、調査作品数そのものの減少による影響である。実際 18 世紀末には、全盛を誇った豊竹座、竹本座ともに浄瑠璃から退転しその姿を消した[xii]。

グラフ 1　年代別「待つた」表現出例分布



2-3 「待つたり」表現

2-3-1 初出例、出例数、及びその特徴

「待つたり」表現の初出は「待つた」タイプに比して遅く、次の (1) (2) に示すように、「まつたまつた」初出の 38 年後に、まず「買たり買たり」が見られ、その 18 年後に初めて「待つたり」が出例する。以下、その出例状況、特徴などについて述べる。

〈「買たり」の初出〉

(1) 元文元年（1736）「和田合戦女舞鶴」　（『豊竹座浄瑠璃集』2巻: p.95）
放し鳥雀や雀。やれ来たり買たり買たり（かうたり）。鳩は八幡のつかはしめ。雀は親に孝行鳥。

〈「待つたり」の初出〉

(2) 宝暦4年（1754）「傾城天の羽衣」　（『徳川文藝類聚』並木正三:p.80）
天「黒格子のお萬様とは爰でムり升かへ、與「イヽへそんな○　アヽ待つたり聞いたやうな名じや、トそつと表をのぞいて（以下、略）

(1) は放生会の鳥売りの呼び声であるが、この他にも、「楠昔噺」（延享3年: 1746）中に見られる端午の節句の飾り物売りの呼び声や[xiii]、「摂州渡邊橋供養」（寛延元年:1748）中の薬売りの呼び声[xiv]など2例がある。「買たり」の2例目は初出例の10年後であり、3例目は更にその2年後で、その出例頻度は決して高いとはいえない。

「待つたり」の出例は(2)の他には同じく並木正三の宝暦8年(1758)の歌舞伎作品「三十石船艪始」[xv]、近松半二の明和2年(1765)の浄瑠璃作品「蘭奢待新田系図」[xvi]において、また、菅専助の明和7年(1770)「小田館雙生記」[xvii]等においても見られる。

以上の調査結果から、「待つたり」表現の初出は、「まつた」の初出（元禄11年: 1698）に比較し38年遅れであり、「待つたり」はその56年後と相当な遅れがあるといい得る。

次に「待つたり」表現の出例数、出例状況をまとめ表2に示す。同表からは次の(3)(4)(5)が確認された。

(3)「買たり」、「待つたり」の初出後、同タイプの表現は「契たり」、「並だり」などその表現の幅を広げている。

(4)「待つた」表現の出例総数260例に対し、「待つたり」タイプ表現の出例総数は26例と少ないが、その中で「待つたり」の出例数は10例と相対的に多い。

(5)「待つたり」表現にも待遇表現は付加されていない。

(4)（5）は「待つたり」表現の特徴と考え得る。「待つた」同様に、「待つたり」の出例数の相対的多さが確認された。

表2に見られるように、「待つたり」表現の出例数は「待つた」表現の出例数に比べ、かなり少ない。そこで浄瑠璃作家の個人レベルにおける「待つたり」表現と「待つた」表現の使用状況を比較したところ、やはり「待つたり」の使用頻度は低く、例えば、並木正三作品中では前者の使用例は3例、後者の使用例は19例であった[xviii]。近松半二、菅専助においても同様の結果であった。

表２　個別「待つたり」表現の出例数及び出例年

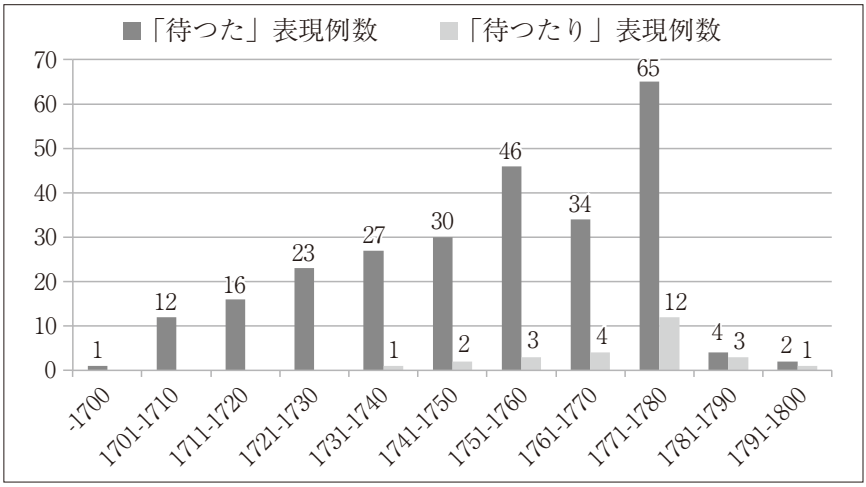
個別例	例数	出例年
来たり来たり買たり買たり	3	1736，1746，1748
待つたり	10	1754，1754，1758，1765，1766 1770，1776，1780，1789，1799
契たり	1	1764
指て見たり	1	1764
並だり並だり	1	1772
髪も撫付ケたり湯も遣ふたり	1	1773
振たり	1	1773
置ィたり	1	1773
床几かしたり	1	1776
寄つたり寄つたり	2	1778，1789
出直したり出直したり	1	1779
直つたり直つたり	1	1780
髪も結うたり鐵もつけたり	1	1780
積だり積だり	1	1781
合計	26	

2-3-2　年代別「待つたり」表現の出例分布

「待つたり」表現総出例数 26 例の 10 年毎の年代別出例数を「待つた」表現のそれと比較し、その分布状況をグラフ２に表した。同グラフからは次の２点が明らかになった。

(1)「待つたり」表現は、元文元年（1736）初出以降、少ないながらも次第

グラフ２　年代別「待つたり」表現出例分布



に出例頻度を増し1770年代には最も多い出例数、12例となった。従って分布的には、元文元年（1736）を起点と考え得る。

(2)「待つたり」表現の出例全体が、「待つた」表現に比べかなり遅れて出例している。

3．考察

これまでの調査結果に基づき、表題表現の成立時期、「待つたり」表現の成立の遅れの原因、同表現と並列表現の関係、及び「待つた」表現が多く出例する理由について考察する。

3-1 「待つた」・「待つたり」表現の成立時期

先ず、「待つた」表現の成立時期について考察する。

2-2-1において述べたように古浄瑠璃期から新浄瑠璃への過渡期までの、所属不明の正本、或いは六字南無衛門、若狭守藤原吉次、井上播磨掾、伊藤出羽掾、山本角太夫、加賀掾らの168正本中には「待つた」表現の出例は見られなかった。

従って、2-2-1(1)で示した元禄11年(1698)、近松「上京の謡始」中の「まつた」が同表現の初出であった。それはとりもなおさず、同作品の観客達にはこの「まつた」表現は既に理解されている表現であったことになる。であるならば、同表現は元禄11年以前に既に成立していなければならない。

そこで、同表現の初出年とその成立時点との間の時間的な隔たりについて検討した。その結果次の3点から同表現の初出年はその成立時点の近接時点と見なしてよいと考え得る。

(1) 先にも述べたが、湯沢（1955）『徳川時代言語の研究』において「待つた」表現の最も早い使用例として宝永3年（1706）「起きた起きた」が示されている。それは近松における「まつた」の初出、元禄11年（1698）と時間的にはかなり近く、「待つた」表現初出時点としてのその妥当性を裏付ける。

(2) 2-2-1(2)－(4)に示したように、同表現初出後、その出例は近松ばかりではなく、加賀掾、紀海音の作品へと広がりをみせ、2-2-2(8)とグラフ1が示すようにその使用頻度は初出年代を基準として、年代毎に概ね出例数が増加し続けている。

(3) 2-2-1(5)及び、表1に示したように「まつた」出例後は、それ以外の表現、「出た出た」、「起きた起きた」、「明た明た」等の表現も出例数を増やしその表現幅の広がりが確認され、同表現の成長が見られる。

以上の考察より、「待つた」表現の成立は、初出の元禄11年（1698）や、そ

の後の同表現の出例状況などを考慮し元禄末までには既に成立し、その後更に使用の広がりを見せたと考えられる。

次に、「待つたり」表現の成立時期であるが、同表現の調査範囲内における総出例数は 26 例で、「待つた」表現総出例数のわずか 10％に過ぎない。

そうした調査上の限界はあるが、2-3-1 (1) に示した元文元年（1736）における同表現の初出例「買たり買たり」は物売りの呼び声であり、その当時の人々に十分なじみのある表現と言わねばならない。

しかも、2-3-2 グラフ 2 から明らかなように、その初出年を起点に次第にその出例頻度を高め、2-3-1 (3) に述べたように「並だり並だり」「契たり」等その表現幅を広げ表現として成長を見せている。

従って、「待つたり」表現の成立時期は、「待つた」表現同様に、「待つたり」表現の初出年あたりを一つの近接時点とし、18 世紀初期、30 年代迄と推測することが可能である。

実際、浄瑠璃が語り物でありそれが太夫から太夫、或いは作家へと受け継がれていく一面を持つことを考え合わせれば、もし「待つたり」表現の成立が先であるならば、「買たり」が「まつた」の 38 年後に初めて出例し、「待つたり」が「まつた」の 56 年後に初めて出例するようなことはないと考える。

また、1 . はじめに、で述べたように、湯沢（1955：p.370）『徳川時代言語の研究』及び、湯沢（1957：p.406）『江戸言葉研究』の両著においても、「待つた」表現の出例年が宝永 3 年（1706）であるのに対し、「待つたり」表現の出例年はそれより遅い文化 6 年（1809）であり、やはり「待つた」表現の成立が「待つたり」表現の成立より早いことを推測させる。

こうしたことからも、「待つたり」表現の成立時期は「待つた」表現の成立時期よりも遅く、18 世紀の初期、その 30 年代迄であることが裏付けられると考え得る。従って、表題表現の場合は「待つた」表現の成立が「待つたり」表現の成立より早いといえる。

3-2 「待つたり」表現と並列表現

では、なぜ「待つたり」表現の成立が「待つた」表現のそれより遅くなったのであろうか。先ず、その原因について考察する。

助動詞「たり」は室町時代末には既に連体終止法の一般化などを通して「たる」から「た」へと変化していた[xix]。

湯沢（1937：p.47）『国語史　近世篇』によれば、

> 近世に入ると（中略）助動詞「たり」は次第に完了の意を失って、単に並列の場合に用いる助詞化した

とされる。とすれば、助動詞としての「たり」の使用頻度は下がると考えられるが、実際、飛田良文（1972:pp.57-58）は西鶴の『好色一代男』（天和2年頃:1682頃）中における「た」、「たり」の使用頻度を比較しているが、会話文中における終止形「た」の使用22例に対し「たり」の使用は1例であったと述べている[xx]。

そこで、近松の「曽根崎心中」（元禄16年1703）や紀海音の「なんば橋心中」（宝永3年1710）の会話文中の「た」と「たり」の使用頻度を比較したところ「曽根崎心中」において「た」の使用24例、「たり」の使用は2例、「なんば橋心中」においては「た」35例、「たり」2例であった。つまり、終止形「たり」の使用は会話文中においてはかなり少なく、湯沢（1937）の記述通りであることが分かる。ごく大まかにいえば西鶴、近松、紀海音の頃には会話文中において終止形「たり」は殆ど用いられない状況であったということになる。そうした助動詞「たり」の衰退状況下において新しく「待つたり」表現が成立するとは考えにくく、「たり」の助詞化による使用頻度低下が「待つたり」表現の成立を遅くした一因ではないかと推測し得る。

こうした事情による同表現成立の遅れが、また「待つたり」表現の出例の少なさとも関連しているのではないだろうか。

次に、「待つたり」表現の成立と並列表現の関係について考える。

湯沢（1955:p.367）には、並列の「AたりBたり」の例として次の甲乙2タイプが挙げられている。

（1）甲　調伏したり呪うたり、挙句に毒をかはれうもしらぬ。

（「姫蔵大黒柱」:p.13 元禄12年1699）

身が盗みをしたり娘をころした志が無になります。

（「傾城壬生大念仏」:p.169 元禄15年1702）

（2）乙　叩いたり喰い付いたりする天草陣の時のこと、今は古い。

（「傾城浅間嶽」:p.440　元禄11年1698?）

つまり、並列の甲には①「AたりBたり」、②「AたりBする」、乙には③「AたりBたりする」のタイプがあることになる。湯沢（1955:p.367）はこの乙のタイプについて「重ねて述べたものを（する）で受けて全体として一つのサ変動詞のように用いた例」と述べている。

ところが、これらの並列表現と、「待つたり」表現は次の（3）に示すように形が大変類似している。

（3）髪も撫付ケたり湯も遣ふたり。サアサア部屋へお出いな。

（「伊達娘恋緋鹿子」安永2年（1773）、『菅専助全集2』:p.348）

そこで並列表現の「AたりBたり」と「待つたり」表現の関連性の有無を調

べるために、「まつた」初出後から、「待つたり」表現初出の元文元年（1736）以前頃までの並列表現を調べたところ、『古浄瑠璃正本集』加賀掾編５巻中に11例、『近松浄瑠璃集　上･下』中の世話物浄瑠璃に５例、『紀海音全集』1，5，7巻中の世話物浄瑠璃中に12例、『西沢一風全集』4，5，6巻中に13例、『竹本座浄瑠璃集』、『豊竹座浄瑠璃集』各1，2巻中に７例の合計48例が確認された。

この48例中、「詞」中に出例する31例のタイプを検討したところ、湯沢（1955：p.367）のいう甲①「ＡたりＢたり」タイプが21例、②「ＡたりＢする」タイプが６例、乙③「ＡたりＢたりする」タイプが４例であった。

②のタイプ６例をさらに検討したところ、「Ｂする」の部分が未然形１例、連用形３例、命令形が次の（4）（5）に示すように２例みられた。

（4）「よたれをたれすにすたれもかけたり火入れに火をも入れさしやれ」

（「長命寺開帳」、『古浄瑠璃正本集』加賀掾編５巻：p.321、正徳元年以前1710以前）

（5）ちとわさわさ気を持て髪もいふたり酒でものみや。

（「三勝・半七二十五年忌」『紀海音全集』５巻：p.79）

このように命令された（4）の使用人は、普通であれば「すたれを掛け、火入れに火を入れる」ことになり、（5）であれば母が三勝に「酒を飲むように促している」ことになる。また、並列表現の③のタイプ、「ＡたりＢたりする」4例の「Ｂする」部分は、連用形２例、連体形２例であった。従って、出例は見られなかったが「Ｂする」部分が命令形となる場合も当然考えられる。

つまり、「待つたり」表現初出以前におけるこうしたサ変動詞化した並列表現の命令形が、並列表現に命令、要求、促しのイメージを与え、そのことが「待つたり」表現成立の誘因の一つとなった可能性があるのではないかと推測される。

しかしながら、この並列表現と「待つたり」表現の関係については①のタイプの多いこと、更に調査範囲、検討例数とも不十分であり、今後さらなる調査、考察が必要である。

3-3　多く出例する「待つた」

2-2-1（7）で述べたように、「待つた」の出例数は同表現の総出例数の69.6％、181例と大変多かったが、その理由について考える。

「待つた」は、その場において相手の行動を制止しようとする意味を持つ。例えば2-2-1（1）に示した「まつたまつた」であれば、王子が「しんでんへかけ入ろうとする」のを制止しようとする。言い換えれば、相手に「…するのをまて」、「…するな」と言っているが、否定命令の「入るな」のような形では表していない。「待つた」表現にはそれぞれの表現に対応する否定形がないか

らである。そのため相手に「…するのを待て」、「…するな」とその動作を制止しようとする時には「待つた」で代行している。言い換えれば、「待つた」は「待つた」表現の「否定形」ともいうべき働きを持つ。この働きを仮に〈否定命令代行〉機能と呼ぶこととする。

命令文の場合は、例えば、「起きろ」に対する「起きるな」、「明けろ」に対する「明けるな」等のように動作を表す動詞の数だけその否定命令の表現、「…するな」があり得る。しかし、「待つた」表現の場合、「起きた」に対する否定形、「明けた」に対する否定形など、否定形がない。その不便さを補うために「待つた」による〈否定命令代行〉が行われる。それは話者にとって大変便利である。その便利さが「待つた」が多く出例する一因になっていると考えられる。つまり、「待つた」の〈否定命令代行〉機能が、その出例を多くしている一因と考え得る。「待つたり」の出例が相対的に多い理由も同様と考えられる。

4．結論

以上の考察から、表題表現の成立時期、「待つたり」表現の成立の遅れの原因、その成立と並列表現の関係、及び「待つた」が多く出例する理由について次のような結論を得た。

(1)「待つた」表現の成立時期は同表現の初出例の近接時点、17 世紀末頃と考え得る。「待つたり」表現の成立時期はその初出例の近接時点、18 世紀初期と考えられる。

(2)「待つた」表現の成立は「待つたり」表現の成立より早く、それぞれ独自に成立した。

(3)「たり」の助詞化が「待つたり」表現成立の遅れの一因と推測される。また、並列表現の一タイプである「ＡたりＢする」、「ＡたりＢたりする」の命令形がその成立に何らかの影響を与えた可能性が推測される。

(4)「待つた」、「待つたり」の多出例はその〈否定命令代行〉機能が一因である。

5．おわりに

表題表現の考察においては、「たり」の助詞化、「待つたり」表現と並列表現の関係、さらにまた、同表現にはなぜ待遇表現がつかないのか等の点においてまだまだ調査、検討が必要である。今後の課題としたい。

最後に 10 余年の長きに亘りお励まし、ご指導を頂いた今仁生美先生に心より深く感謝申し上げます。誠に有難うございました。

注

i　資料の中には「詞」の記入のないものもあった。

ii　河竹繁俊『近松門左衛門』p.48，祐田善雄『浄瑠璃史論考』p.23

iii　出典及び出典中の調査正本数については参考資料及びそれに［正本数 ］を付して示した。

iv 「浄瑠璃十二段」、「ちゆうしやう」、「たかたち」、「むらまつ」、「石橋山七騎落」

v 「やしま」

vi 「いけとり夜うち」、「きよしけ」、「阿弥陀本地」、「すわのほんぢ兼家」、「よりまさ」、「はらた」、「あかし」、「ゆみつき」、「ともなか」、「ふせや」

vii 「にたんの四郎」、「ふみあらひ」、「義経記初巻」、「にわうの本地」、「いし山もんだう」、「今川物語」、「浄土さんたん記」、「善たう記」、「花山院きさき諍」、「日本王代記」

viii 「あさいなしまわたり」、「大友まとり」、「宇佐八幡のゆらひ」、「よこぞねの平太郎」、「きしぼじん十らせつ女のゆらひ」、「中将姫之御本地」、「一心二河白道」、「ひだのたくみ」、「どんらんき」、「七夕之本地」、「日蓮上人ご誕生記」

ix　新浄瑠璃への過渡期以後の加賀掾浄瑠璃作品中に見られる「まつた」の出例は 6 例である。その中で最も早い出例は元禄末から宝永初年とされ、はっきりとした出例年が確定できていない。今後その出例年が確定された場合、同表現の初出年が元禄 11 年（近松の「まつた」の初出年）より早まる可能性もある。

x 『古浄瑠璃正本集』5 巻中の「中将姫之本地」（p.196）、「どんらんき」（p.419）など

xi　これらの 260 例に関しては、その出例、出例年、出典、頁数を一覧表にまとめた。紙数の関係で本稿には掲載できてはいないが、随時ご参考に供することが可能である。表 2 の 26 例についても同様である。

xii　黒木勘蔵『浄瑠璃史』pp.529-530、諏訪春雄『近世戯曲浄瑠璃史』、『黄金時代の浄瑠璃その後』岩波講座歌舞伎・文楽 9 巻 p.132、p.173

xiii 『竹本座浄瑠璃集』3 巻 p.397 「サア、来たり買たり買たり」

xiv 『豊竹座浄瑠璃集』3 巻 p.220「それ買たり（かつたり）やれ来たり。仙台に隠れない徳内が膏薬だ。」

xv 『脚本傑作集』p.60

xvi 『半二戯曲集』p.208

xvii 『菅専助全集』1 巻 p.360

xviii 『徳川文藝類聚』中の「傾城天の羽衣」及び「三十石船饂始」中における出例数

xix　小林千草『ことばの歴史学』（pp.81-83）

xx 『品詞別日本語講座 8　助動詞Ⅱ』（pp.57-59）「江戸時代は、会話と地の文とで、タ、タリ、タルとの使い分けが明確になってくる」としてその調査結果の表が掲載されている。

調査資料（［　］内の数は参照正本数をしめす。）

『古浄瑠璃正本集』1･2･3･4･5･6･9 巻［37 正本］　角川書店Ⅰ巻, 2 巻, 3 巻（1964）4 巻（1965）5 巻（1966）6 巻（1967）9 巻（1981）

『舞の本』岩波書店（1994）

『近松全集』1-16 巻［137］　近松全集刊行会　1 巻（1985）-16 巻（1990）

『古浄瑠璃正本集』1-5 巻（宇治加賀掾編）［84］　大学堂書店（1989-1993）

1-3 巻（山本角太夫編）［53］　大学堂書店（1990-1994）
『紀海音全集』1-7 巻［43］　清文堂出版　1 巻（1977）- 7 巻（1980）
『西沢一風全集』4 巻 -6 巻［10］　汲古書院　（2004-2005）
『豊竹座浄瑠璃集』1-3 巻［15］　国書刊行会（1990-1995）
『竹本座浄瑠璃集』1-3 巻［15］　国書刊行会（1988-1996）
『竹田出雲・並木宗助浄瑠璃集』新日本古典文学大系［4］　岩波書店（1991）
『文楽浄瑠璃集』日本古典文学大系［1］　岩波書店（1985）
『浄瑠璃集上』日本古典文学大系［1］　岩波書店（1980）
『近松半二浄瑠璃集』1-2 巻［8］　国書刊行会（1987）（1996）
『近松半二集』日本古典全書［2］　朝日新聞社（1949）
『脚本傑作集』［1］　博文館（1929）
『近松半二浄瑠璃集』［3］　博文館
『半二戯曲集』［8］　国民文庫刊行会（1910）
『竹田出雲浄瑠璃集』［1］　博文館
『徳川文藝類聚』［1］　国書刊行会（1916）
『忠臣蔵浄瑠璃集』［2］　博文館（1929）
『近松半二・江戸作者浄瑠璃集』新日本古典文学大系［3］　岩波書店（1996）
『菅専助全集』1-6 巻［33］　勉誠社（1990-1995）
『浄瑠璃集』［1］　小学館（1971）
『上方歌舞伎集』新日本古典文学大系［1］　岩波書店（1998）
『西鶴集』上・下　岩波書店（1968）
「戯言養気集」『噺本大系第 1 巻』東京堂出版（1975）
『醒睡笑』笠間書院（1982）

参考文献

河竹繁俊（1988）『近松門左衛門』　吉川弘文館
黒木勘蔵（1943）『浄瑠璃史』青磁社
小林千草（1998）『言葉の歴史学』丸善株式会社
諏訪春雄（1985）『近世芸能史論』笠間書院
　　（1986）『近世戯曲史序説』泉社
高埜利彦（2003）『日本の時代史 15』－元禄の社会と文化－
土田衛・他（1992）『上方の文化　上方言葉の今昔』大阪：和泉書院
鳥越文蔵・他（2002）『浄瑠璃集』小学館　新編日本古典文学全集 77
鳥越文蔵・他 編（1998）『浄瑠璃の誕生と古浄瑠璃』岩波講座　歌舞伎・文楽　第 7 巻
　　（1998）『近松の時代』同上第 8 巻
　　（1998）『黄金時代の浄瑠璃とその後』同上第 9 巻
林玲子編（1992）『日本の近世』第 5 巻　商人の活動
飛田良文（1972）「完了の助動詞」『品詞別日本語講座 8　助動詞Ⅱ』明治書院
山口明穂・他（1997）『日本語の歴史』東京大学出版会
　　（1987）『国文法講座』第 5 巻　明治書院

祐田善雄（1975）『浄瑠璃史論考』中央公論社
湯沢幸吉郎（1937）『国語史　近世篇』刀江書院
（1955）『徳川時代言語の研究』風間書房
（1957）『江戸言葉の研究』風間書房
（1981）『室町時代言語の研究』風間書房

（いのうえ　のりこ）